
[総合地域研究所 平成29年度「共同研究」報告]

佐倉市との連携に係る事業の定着

「教育」・「研究」・「地域貢献」の一体化を目指して

代 表：村川 庸子 (敬愛大学国際学部教授)
副 代 表：山本 健 (敬愛大学国際学部教授)
研究分担者：田口 功 (敬愛大学国際学部教授)
高田 洋子 (敬愛大学国際学部教授)
田中 未央 (敬愛大学国際学部准教授)
佐藤 佳子 (敬愛大学国際学部准教授)
学外研究員：高橋 修 (土地改良区鹿島川)
上野 裕子 (佐倉市企画政策部企画政策課)

はじめに

長年にわたり「国際学部でアグリ」と称して行ってきた本共同研究では、水土里ネット(土地整理組合)や近隣の農家の方々、千葉黎明高校との関連による事業に加え、近年は佐倉市と本学の包括連携協定を基盤とした事業を通して、学生の教育に取り組んできた。また、昨年度は、佐倉市で実施した、佐倉藩出身の農学者津田仙(津田塾大学創立者津田梅子の父)の講演会を通して、「アグリ」と「佐倉」、「国際化」を結びつける視座を得ることができた。「教育」、「研究」と「地域貢献」。大学の教員が求められる3つを一体化するための試行錯誤を続けてきた。

当初は「教育」に軸足を置いていた。他大学の国際学部が行っていないことはないか、それを通して日本社会や世界を見ることができるものはないか、ということで「フード&アグリ」の活動を始めた。誰にも身近で、しかも「国際化」が進む分野である。生活経験が乏しいように思われる学生たちに、自分が多くを学んだフィールド調査を通して学ぶ場を提供したいと思った。「農学を知らない素人が」という批判は学内でもわずかながらあったが、協力してくださる先生や職員の方々も多かった。「そもそも、百姓は百の姓と書くように、多くの専門から成り立つ分野なのだ」という専門家の言葉にも支えられた。

「地域貢献」などというのはおこがましいと思う。多くの方々に助けられてきた。まず、「アグリ」の活動の最初から協力してくださった水土里ネットの高橋修氏。水土里は県・国の農政とつながる農業関連団体で、印旛沼流域の農業用水の管理を行っている。気候に恵まれ、巨大市場である東京に隣接する千葉は、農業においても恵まれた立場にある。これからの学生たちは、農業に限らず、我々の世代が経験しなかった「変化」に対応する必要がある。それを体験できる場所はないか、というお願いに山梨県北杜市を推してください

ったのは高橋氏であった。中国やベトナムの農村の幹部に対する研修を行うなど国際的な活動も行って、本学の留学生が通訳としてこの研修に参加させていただいたこともある。数年前は、ピーナッツの収穫を体験したいという中国人留学生のグループを農家さんに紹介していただいた。

千葉黎明高校の西村茂校長、根本明彦教頭には何度か学生の研修をお願いした。同校で、先生方が生徒さんのことばかり話しておられたのには何度も感動した。本学にまで足を運んでいただいて、門松作りを教えていただいたこともあった。

佐倉市の蕨和雄市長、企画政策課の上野裕子氏はじめ多くの方々にも大変お世話になっている。特に、昨年2月に佐倉市と津田塾大学、本学の三者で共催したパネル講演会「佐倉の国際化：津田仙から梅子へ」は我々教員にも大きな影響を与えた。佐倉は国際学部揺籃の地であり、古くから西洋文明が開いた場所と聞いてはいたが、これほど豊かな歴史が秘められた土地であったことは寡聞にして知らなかった。ペリー来航の頃の老中として知られる堀田正陸の藩政改革や教育奨励、特に蘭学の奨励はその後、多くの有為の人材を輩出している。母校、津田塾大学の創立者である津田梅子の父、仙もその一人だが、彼について殆ど知らなかった不明を恥じ、少しずつ資料収集を進めている。今後、学生も交え、日本の近代化における佐倉の役割に関する研究を進めてみたいと思っている。

今後は、大学が、地元へ貢献するために何ができるのかを中心に考えていきたい。

ここ数年は、筆者の体調不良で思うような活動ができなかったが、ここにきてまとめの段階にたどりつきそうな気がしている。来年度に大きな形にすることを約束し、本稿では本年度の活動の概略を報告したい。

水土里ネット印旛沼（現在、高橋氏は水土里ネット鹿島川に所属）関連事業

今年度は、10月の体験フェアが台風で中止になり、7月23日のシンポジウムに参加しただけで終わってしまった。今後は、規模をやや縮小して、農業・環境関連の活動、地元の方々との交流、PBL課題解決型学修の実践を続けていきたいと思っている。

2017年7月23日 環境シンポジウム「トキやいきものと共に暮らす社会」

佐倉市立美術館で印旛沼環境基金による環境シンポジウム「トキやいきものと共に暮らす社会」が開催され、学生と参加した。特に佐渡市役所農業政策課野生生物課の西牧孝行氏の講演は、佐渡にトキを呼ぶまでの苦労・問題点が直截に語られ、興味深かった。千葉県でも昭和20年代まではトキが見られたという。「下総台地に広がる印旛沼流域は水辺を中心に生物多様性に富んだ地域でした。この豊かな自然環境にトキが生息し、多くのトキが越冬していたと考えられます。私たちは子どもたちの未来のためにいのちあふれる豊かな環境を再生し、“下総の地にまたトキが飛来する”そんな夢をかなえたいと思います。」とチラシにある。「佐渡では実現できても、千葉では無理ではないか」といった会場の反応に、「実際にトキを呼ぶことは難しいかも知れないが、そのくらいの生物多様性が欲しい」という発言が心に残った。役所と民間の協力は必ずしも簡単ではない。佐渡では、西牧氏が一歩踏み出して、直接農家の方々に働きかけている。これまでの「国際学部でアグリ」の活動で、他の地域でも、役所の若い方が、通常の職域を一歩も二歩も踏み出して、具体的な問題を一つずつ解決していく事例を見聞きしてきたが、本件もその一つの事例と言えるのではないだろうか。

2017年10月28日 第15回印旛沼流域環境・体験フェア

昨年まで、2年続きで担当の筆者の体調不良で参加できなかったフェア。今年は是非参加したいと、学生たちと数年前の海外スクーリングで訪ねた米国ワシントン州のステートフェア（農業祭）が何等か参考になろうかと、掲示物などを用意していたが、残念ながら台風で中止となった。本共同研究にもご参加くださっている土地改良区鹿島川の高橋修氏は、以前から「印旛沼にカルチュラタンを」を掛け声に、大学や高校のフェアへの参加を進めていて、その発想に筆者も大いに触発されてきた。参加校は年々増えており、現場での交流や情報交換も盛んになっている。来年以降も何らかの形で参加していきたいと考えている。

◎佐倉市関連事業

8月6日 佐倉市・城下町400年記念事業佐倉学リレー講義〔特別編〕「Who is Sen?」

日本に西洋野菜を広め、近代農業の普及に努めた津田仙の生誕180周年を記念する講演会が開かれた。津田は青山学院の設立など、教育界での貢献も大きい。筆者はオープンデイスカッションの進行役として参加した。講演はシュー・土戸・ポール氏（青山学院大学教授）「時代を超え、世界を変えるチャレンジャーとしての津田仙」と仙の曾孫である津田道夫氏「近代化へ 実行の人 津田仙」。

前夜の印旛沼で行われた花火大会では、仙の生誕記念の花火も打ち上げられた。講演には300名近くが集まった。

8月9日 佐倉市・かわまちづくり計画に関するヒアリング

佐倉市企画政策課の上野裕子氏他の皆さんと、今後の活動に関する打合せを行った。

10月15日 佐原研修2017（佐倉市との比較の視点から）

昨年に引き続き、2度目の佐原研修を行った。佐原は東日本大震災で液状化による大きな被害を受けたが、「観光」を中心に据えた復興・再生に取り組み、昨年、佐倉・成田・銚子と共に「北総四都市江戸紀行・江戸を感じる北総の町並み」が日本遺産に、次いで「佐



忠敬旧宅前の小野川にかかる橋。江戸時代は川の東岸から対岸の水田に水を送る樋があった。現在は30分毎に落水する音から「ジャージャー橋」と呼ばれ、観光名所の一つとなっている。「残したい日本の音風景100選」にも選ばれている。



忠敬記念館にて記念写真。冷たい雨の一日だった。

原の山車行事」がユネスコ無形文化遺産に登録された。佐倉では町が持つ魅力が十分には発揮できていないように感じてきた。日本人観光客は勿論、インバウンドも増えているという佐原の「奇跡の復興」がどのように成し遂げられたのか、その秘密を探ってみたいと思った。

9:30に稲毛駅発。10:30に佐原に到着した。秋の大祭の日で、町の中心から離れた河川敷の駐車場からシャトルバスを利用することになった。伊能忠敬記念館や忠敬の生家を見学した他は、山車を見ながら「小江戸」と呼ばれる祭りの町を散策した。先回と同様、佐原在住の、千葉敬愛短期大学元学長の伊藤勝博先生が迎えてくださり、ボランティアでガイドを務められている奥様をご案内くださった。

昨年の調査の時にも感じたが、かつての印旛沼は霞ヶ浦などとも一つになった、巨大な水圏を成していた。現在の陸上交通の時代とは異なる人的交流もあったはずで、我々が「地域」としての「佐倉」を考える時にも、印旛沼水圏、あるいは更にこれを拡げて見ていく必要があるのではないかと感じさせられた。記念館では彼が入手したオランダ語の文献の購入リストなどが残されており、「蘭学」の拡がりも強く感じられた。

帰路、「道の駅こうざき」に立ち寄った。全国初の「発酵」をテーマにした道の駅で、地元をはじめ全国の発酵食品を取りそろえた「発酵市場」がある。経済学部の藪内正樹先生（総合地域研究所長）の紹介で、神崎町まちづくり課の澤田聡美氏が町おこしの試みについて話してくださった。有名な佐原の大祭を学生、特に留学生に見せたいと思ったが、シャトルバスでの移動に時間がかかり、また、グループがバラバラになったことで集合時間が守られず、神崎町での見学に十分に時間を取ることができなかった。この研修には経済学部の遠藤貴美子先生と国際学部の山本健、田口功両先生、外部からエレン・ハモンド先生が参加してくださった。

12月14日 佐倉市教育委員会文化課 日暮冬樹氏講演「Who is Masayoshi Hotta?」

2018年1月20日に実施する佐倉研修に向け、佐倉市教育委員会の日暮氏に堀田正睦に関する講演をお願いした。堀田正睦はペリー来航時の老中で、日本史の教科書でも馴染みの名前であるが、日米修好通商条約締結の際の勅許に関する不手際で罷免のうえ蟄居、間もなく息子の正倫に家督を譲り、隠居、日本近代史の表舞台から消えている。

堀田正睦は文化7年（1810）年、江戸の佐倉藩上屋敷に生まれた。父正時、母はその側室で、文政8（1825）年、従兄の正愛の逝去後、家督を継承する。天保8（1837）年に老中となり（～天保14年）、安政2（1857）年、再任（～安政6年）、安政4（1857）年に日米修好通商条約調印に向け、上洛し、勅許を求めるが失敗、その責めを負って蟄居させられる。ハリスとの対談の記録などを引きながら、正睦の人となりや垣間見ることができた。

佐倉藩の財政建て直し、海防への関与、文武奨励、特に蘭学の奨励など、開明的な君主であったと思われ、その中から西村茂樹や佐藤泰然など、明治の世に活躍する人々が現れることになる。安政5（1858）年、隠居し、家督を息子の正倫に譲っている。

時期的に風邪・インフルエンザが流行っており、学生2名、教員2名という小さな会になってしまったのは残念だったが、この時に得られた情報は学生の研修の折などに活かしていきたいと思っている。また、この際の日暮氏からのお申し入れで、2月に佐倉で開催される佐倉学歴史講演会の鼎談への筆者の参加をお引き受けすることとなった。

2018年1月20日 佐倉研修

通算で3度目となる佐倉での研修を行った。9:30に稲毛駅を出発、佐倉市内の旧堀田邸、佐倉高校地域交流館の鹿山文庫と国立歴史民俗博物館を見学し、17:00頃、稲毛に無事帰着した。

今回は、昨年度の研修の際に順天堂記念館のホームページを中国語で作成した王堯玉さん(国際学科3年)の経験を踏まえ、多言語で佐倉を紹介することを直接の目的とした(http://www.u-keiai.ac.jp/international-news/34_59f131f468d10/upload/20171026-103028-2852.pdf; http://www.u-keiai.ac.jp/international-news/34_59f131f468d10/upload/20171026-103028-6149.pdf参照)。佐倉市のHPにも多言語で市内の観光地が紹介されているが、最小限の情報が並べられているだけで、必ずしも外国人にとって魅力的な内容ではないのではないか。日本史の知識も十分でない人々が訪問してみようと思うようなHPを作成するところに、今回の研修の目的を置いた。経済学部元教員の加茂川益郎先生、国際学部開設初期の敬愛大学の教員で、米国に戻って最近までエール大学東アジア図書館館長であったエレン・ハモンド先生、3年前の卒業生鈴木花実さんも参加して下さった。ハモンド先生は一通り研修が終わった段階で、英語で取りまとめの講義をして下さった。堀田邸では佐倉市文化課からご依頼いただいたボランティアガイドの方が、鹿山文庫では佐倉高校総務課の入江順一氏が案内して下さった。

学生の感想の一部を紹介しておこう。

学生のコメント：国立歴史民俗博物館：高校の歴史で学ぶことですが、あくまで必要なことしか教えられないので、ここまで詳しく見ることはないですし、こんなに多くの資料を直接見ることはできないですし、とても頭の中に印象づけられました。

(一年 関端)

学生のコメント：The National Museum of Japanese History is also awesome! The place is full of exhibits that really fascinated me in a way that Japan before was absolutely a great place in general. Everything was professionally displayed and well explained by audio narrations.

(一年 浅野)

当初、学生11名、教員2名と外国人講師、卒業生1名が参加予定だったが、学生2名が諸事情により欠席。13名での研修となったが、これまでよりも実のある研修になったように思われる。今回は中国語、タガログ語ができる学生が参加してくれている。多言語によ



旧堀田邸でボランティアガイドに建物の特徴について聞く。欄間の柄もお洒落である。



鹿山文庫は藩校時代のハルマ和解など、教材や日蘭語の辞書などの貴重な資料が残されている。



最後の藩主堀田正倫の寄附で明治43年に建築された現佐倉高校記念館。明治期の美しい木造洋建築物。



国立歴史民俗博物館の一室を借りて本日の研修のとりまとめの講義(英語)を受ける学生たち。

る佐倉紹介HPの作成を少しずつ積み重ねて行きたい。

2018年2月17日 佐倉学歴史講演会「堀田正睦と幕末の政局」(於:国立歴史民俗博物館)
平成22(2010)年に始められた「佐倉・城下町400年記念事業」の一貫として、佐倉学歴史講演会が開催され、佐倉堀田家13代の堀田正典氏、佐倉市史編さん委員の内田儀人氏と筆者が講師として参加した。

前半は堀田氏が「堀田正睦と幕末の政局」と題し、曾祖父正睦と祖父正倫の功績について講演された。後半は内田氏が「幕末明治に海を渡った佐倉人」と題し、万延元年遣米使節に随行した小永井五八郎をはじめとして、米国、上海、ドイツ、ロシアに渡航した佐倉関係者について報告された。筆者は日米関係史を専門とする立場から「津田仙の見たアメリカ」と題し、慶應3(1867)年の初渡米の状況と、この渡航がその後の彼の人生に与えた影響などのエピソードを通して、津田仙を通じた佐倉学研究の可能性、これまでの薩摩・長州中心の史観の中で看過されてきた正睦・正倫や佐倉藩の歴史を見直す必要性について論じた。

むらかわ・ようこ Yoko Murakawa
やまもと・たけし Takeshi Yamamoto
たぐち・いさお Isao Taguchi
たかだ・ようこ Yoko Takada
たなか・みお Mio Tanaka
さとう・けいこ Keiko Sato
たかはし・おさむ Osamu Takahashi
うえの・ゆうこ Yuko Ueno